

優秀修士論文概要

現代モロッコにおいてファッションデザイナーであるとは

——「モロッカン・タッチ」のファッションブランドをめぐる人類学的考察——

石 明 美

本稿では、モロッコで生まれ育ったファッションデザイナーが、彼ら自身が解釈する「モロッコらしさ」を反映した、「モロッカン・タッチ（モロッコらしい作風）」を用いて、デザインを制作している有様を、先行研究で指摘される自己オリエンタリズムの状況を踏まえながら、現地の文脈に即して分析を行う。構成は以下のとおりである。

- 序章 問いと視角の提示
- 第1章 先行研究の提示
- 第2章 民族誌的背景
- 第3章 モロッコでファッションデザイナーになる
- 第4章 モロッコにおいてファッションデザイナーである
- 終章 結論

序 章

従来のファッション研究では、地域と服飾体系の差異に基づいて、研究における分業がなされてきた。西洋以外の服飾体系は、「非西洋」という地域のもとにひとくくりにされ、西洋の服飾体系と対比的に語られるのである⁽¹⁾。そのことが、非西洋圏において衣装を生み出すデザイナーの姿を覆い隠し、彼らがそれぞれ衣装に込めた創造性も見過ごす結果を生じさせてきた。

しかし現代において、ファッションはもはや西洋に独占されるものではなく、世界各地に出現している。「非西洋のファッション」と名づけられてきたものの内実には、個々の地域が有する歴史や文化、そこに向けられる他者の視線、さらにはそれらを包含したデザイナー個人の経験や意識など、様々な要素が複雑に絡み合っており、ひとくくりで説明することは不可能である。こうした状況を踏まえ、本稿では、非西洋圏における特定の地域とその文脈の中で制作活動を行う個々のデザイナーに着目する。

第1章

第1章では、装いをめぐる先行研究を振り返りつつ、本稿の問いと調査手法を明示した。

非西洋圏のファッションに関する研究では、しばしばオリエンタリズムをめぐる議論が用いられる。エドワード・W・サイードは、西洋がエキゾチックな他者として東洋を描くスタイルが、西洋中心主義的な思考様式の表れであると指摘したが⁽²⁾、そのように創出されてきたステレオタイプな東洋のイメージが、今度は東洋の側でも活用される、自己オリエンタリズムの現象が起きている。

モロッコのファッション研究で知られる人類学者 M・A・ジャンセンは、モロッコのデザイナーを3

つの時期に区分し、そのうち第2期に活躍したデザイナーたちに自己オリエンタリズム的な兆候がみられると指摘する。そもそもモロッコにファッションがもたらされたのは1960年代からとされ、この第一期のデザイナーたちは主に、伝統衣装を素地とした衣装を制作していた。1990年代から始まる第2期では、デザイナーたちは西洋の衣装に「モロッコらしさ」を取り入れ、「モロッコのファッション」の近代化を進めるが、この制作のあり方が自己オリエンタリズム的なものであると指摘する⁽³⁾。そして、続く第3期のデザイナー（2000年代～）は、第2期の制作のあり方に反発し、可視化できる「モロッコらしさ」を取り除いた制作を行うようになったという。

ジャンセンによる議論では、第3期のデザイナーは、自己オリエンタリズム的な制作と決別すべく新しい制作を模索するとあるが、その分析には以下に挙げる二点の考察が加えられるべきだと考える。第一に、デザイナーたちにとって何がモロッコらしいものであるかを明示すること、第二に、伝統的要素を用いた制作を現在進行形として捉え、デザイナーの日常を含めた詳細な記述をすることである。本研究では、この二点を軸に据えて調査を実施した。筆者は、2023年2月における2週間、及び2023年6月から8月までの2ヶ月間、モロッコ中南部の都市・マラケシュにて調査を実施した。この期間、マラケシュを拠点とする3つのブランドと連絡を取り、それぞれ3名のデザイナーに聞き取り調査を行なった。同時に、より密着した調査を展開すべく、マラケシュ旧市街に店を構えるブランド「Najmah (ナジマ)」に通い、参与調査を行った。

第2章

第2章では、調査地の概要と歴史を整理し、「モロッコらしさ」が構築される背景を考察した。

モロッコの民族独立運動では、イスラームの思想に準拠し、スルタン（国王）が、国家統一の象徴として機能した。その後、国家が独立を果たしてからは、国王を中心にモロッコ人のアイデンティティを示す「モロッコらしさ」を構築してきた。国王が目指した「モロッコらしさ」とは、アラブとベルベルそれぞれのエスニック・アイデンティティを「ムスリム」の上に、緩やかに一体化させることだった。厳密に民族を定義せず、とりわけベルベル人の伝統文化をモロッコらしいものとして、政治的な場で表象することによって、モロッコの伝統は、アラブとベルベル双方からなるものとして創られていった。

第3章

第3章では、聞き取り調査を行った3人のデザイナーのバイオグラフィーを取り上げることで、「モロッコらしさ」に関するデザイナーの認識を整理し、彼らが「モロッカン・タッチ」を打ち出す経緯について分析を行った。

調査を通して、デザイナーたちが実際に、「モロッカン・タッチ」として制作に取り入れるものには、カフタンやジュラバなどの伝統衣装から、刺繍やベルベルの生地、特定の記号や柄、アラビア文字、色彩など、多種多様であることが分かった。このような「モロッコらしさ」とされる要素が衣装に現れる一方で、デザイナーたちはそれを「自己」そのものとして認識している側面がある。これは、「自己」を出発点とした制作が、結果的に「モロッカン・タッチ」として表出したことを意味する。従来の認識では、自己オリエンタリズム的な制作の一環であると捉えられかねないが、本稿が取り上げたデザイナーたちは、制作において他者からの視線よりも「自己」の意志を優先しており、逆に他者に迎合して

いる状況や、迎合しようとする意志は見られなかった。結果的に、作品が他者の期待するものと一致することはあっても、それは意図せずして起こったことであり、少なくとも作品を制作する動機ではないと彼らは認識している。

第4章

第4章では、「ナジマ」のデザイナー・アブデルに密着した民族誌を描くことで、現在進行形である「モロッカン・タッチ」の文脈を読み解いた。本章は、制作に対するアブデルの感情を描いた3つのエピソードから構成される。

第一に、「EP1・制作に対する意識」では、アブデルにとって伝統的なものと色の組み合わせが制作の核をなし、いずれも彼自身のルーツを表すものとして制作のオリジナリティを担保していることが再確認された。アブデルはまた、自己の中に矛盾することなくアラブ人、ベルベル人、アフリカ人という多層的なアイデンティティを持ち合わせている。彼にとって、複数のエスニック・アイデンティティを持つことは矛盾せず、その制作でも、自身を構成する複数の文化的属性を、必要に応じて自由に使い分けている。また、政治的に構築された「モロッコらしさ」を振り返ると、アブデルが自身の中にアラブとベルベルを同居させているのは、「ムスリム」による結びつきを意識してのことではなく、むしろ政治的に構築された「モロッコらしさ」が、共通認識として現代モロッコに浸透した結果といえる。

第二に、「EP2・制作における葛藤」では、アブデルが、異なる動機で似通った「モロッカン・タッチ」を用いる他のデザイナーに対して、複雑な心理を抱く様子が見られた。彼にとって重要なのは、作風や知名度の差よりも他のデザイナーと差別される個性である。だからこそ、「自己」に基づく制作を続ける彼にとって、自らとは異なる文脈から「モロッカン・タッチ」を制作に用いるデザイナーは、意識せざるを得ない存在となる。

第三に、「EP3・ブランドへの期待」では、アブデルが、自らの制作の独自性と自負する「モロッカン・タッチ」で世界に挑む覚悟を持っており、「ナジマ」の将来的な発展に期待を寄せている姿を見ることができた。

以上3つのエピソードを通して、「ナジマ」はアブデルの意識や葛藤、期待が絡み合いながら「モロッカン・タッチ」のブランドとしてその姿を呈していることが分かった。

終章

終章では、結論と研究の展望を示した。

本稿では、現代モロッコのファッションデザイナーに対する理解へ向けて、特定の人物を起点にして記述する手法を通して、彼らが一般化される過程で見過ごされてしまう可能性のある、個々の特殊性を再検討した。具体的には、3名のデザイナーに聞き取り調査を行い、特にそのうちの1名については詳細な民族誌を記述した。彼らの語りを通して、その制作を、自己オリエンタリズムとして定義することも、また自己オリエンタリズムへの反発という文脈に基づいて分析することも困難であることが明らかとなった。デザイナーたちは、「モロッカン・タッチ」を用いつつも、制作動機はあくまでも「自己」を出発点とし、一連の制作には個性が映し出されているのだと強調する。「モロッカン・タッチ」は自己オリエンタリズムの文脈から逸脱して、オリジナリティを表現する素材となっているのである。

注釈

- (1) Niessen, S. A., Leshkovich, A. M., Jones, C. (2003). *Re-Orienting Fashion: The Globalization of Asian Dress*. Berg Publishers.
- (2) エドワード・W・サイード (1993) 『オリエンタリズム 上』 今沢紀子訳 平凡社.
- (3) Jansen, M. A. (2013). Three Ganerations of Moroccan Fashion Designers: Neogotiating Local and Global Identity. *Fashioning identities: cultures of exchange* (pp. 161-180). Critical IssuesOxford: Inter-Disciplinary Press.